



Title	日本育ちの成人継承中国語話者の中国語「動詞・名詞コロケーション」の習得・保持：産出テストの結果と言語背景に着目して
Author(s)	西川, 朋美; 周, 超珂; 岡, 加代 他
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究. 2026, 22, p. 71-86
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/105096
rights	This article is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International License.
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《研究論文》

日本育ちの成人継承中国語話者の中国語「動詞・名詞コロケーション」の 習得・保持

— 産出テストの結果と言語背景に着目して —

西川 朋美（お茶の水女子大学）

nishikawa.tomomi@ocha.ac.jp

周 超珂・岡 加代・唐 姣姣（お茶の水女子大学大学院博士後期課程）

z.tyoka@gmail.com・ioumme1122@gmail.com・tangjiaojiao.ocha@gmail.com

Acquisition/Maintenance of Chinese Verb-Noun Collocations by Heritage Speakers in Japan:

Production Test Results and Language Background Effects

NISHIKAWA Tomomi, ZHOU Chaoke, OKA Kayo & TANG Jiaojiao

要 旨

本研究では、日本育ちの成人継承中国語話者（CHL）30名を対象に、王・西川（2022）の中国語「動詞・名詞コロケーション」の産出テスト、及び言語背景についての詳細な質問紙調査を実施した。中国語母語話者（CNS）のデータは王・西川（2022）のものを用いた。テストの得点については、CNSとCHLの間に有意差が見られた一方で、CHLは個人差が大きく、0点からほぼ満点まで幅が見られた。また、CHLは日本語と中国語の間で意味範囲や語法の異なるコロケーション（動詞）を苦手とし、意味の似た動詞を本来の意味よりも拡張させて用いるなどの回答傾向が見られた。産出テストの得点と言語背景の関係については、来日年齢と得点の間に有意な正の相関関係が見られた一方で、来日年齢が低くてもCNSと同等、あるいはそれに近い得点のCHLもいた。そのようなCHLには、中国語（で）の学習経験の豊かさなどが要因として見られた。

Abstract

A total of 30 adult Chinese-as-a-heritage-language (CHL) participants raised in Japan completed a Chinese verb-noun collocation production test developed by Wang and Nishikawa (2022) and a language background questionnaire. Chinese native speakers (CNS) reported in Wang and Nishikawa (2022) served as a baseline group. A significant difference in test scores was observed between the CNS and CHL groups; however, the CHL group displayed substantial individual variation, with scores ranging from zero to almost a perfect score. Some CHL participants particularly struggled with collocations (more specifically, verbs) whose semantic range and usage differ between Japanese and Chinese, often overextending semantically related verbs beyond their appropriate meanings. Age of arrival (AOA) in Japan and the test scores

correlated positively and significantly. Nevertheless, some CHL participants with early AOA scored within the range of their CNS counterparts. Moreover, for these individuals, richer experience in learning and using Chinese appeared to contribute to their performance. These findings highlight both maturational effects and experiential factors in the acquisition/maintenance of Chinese as a heritage language.

キーワード：継承中国語、コロケーション、産出テスト、誤答の傾向、言語背景

Keywords : Chinese as a heritage language, collocation, production test, error patterns, language background

1. 研究背景

国境を越えて移動し生活を営む人々は、移動先の国（言語圏）で現地の主要言語を習得・使用しながら、自らのルーツとなる国の言語を継承語として習得・保持するという複数言語環境に置かれていることが多い。移民受け入れの歴史が長い欧米諸国では、近年、応用言語学分野において継承語を対象とした研究が注目されてきている（Montrul, 2023, p.408）。移動する人々の存在については、日本も例外ではなく、近年、日本国内で育った外国ルーツの子どもや若者の複数言語能力に注目した書籍も出版されている（近藤ブラウン・坂本・西川, 2019）。ただし、継承語の個別の言語項目に焦点を当て、その知識や能力を精査するような研究は、日本語ではまだ多くはない。本研究では、日本国内で中国語を継承語として育った話者（Chinese as a Heritage Language, CHL）を対象に、実験的手法によって中国語での「動詞・名詞コロケーション」（より具体的には動詞）の産出能力を調査する。本研究における継承語とは、近藤ブラウン（2019, p.1）のいう「親からの継承語」であり、子ども世代が家庭内で親の母語¹⁾に触れていることを前提に考える。ただし、本研究の結果からも分かるように、親の母語である中国語を子ども世代が継承している程度は、人それぞれである。本研究では、継承語の習得・保持の程度と個人差要因（Paradis, 2023）についても、質問紙によるデータを用いて考察を加える。

2. 先行研究

言語習得研究の対象は、誕生時から一つの言語で育つモノリンガルの子どもの対象とした第一言語（L1）習得だけでなく、その研究範囲は第二言語（L2）習得にも広げられてきた。L2 習得研究では、その過程（process）や結果（product）に注目し、L1 習得との違いを論じていることも多い。「親からの継承語」の習得の場合、誕生時から親の母語である継承語に触れているという点では L1 習得と類似する一方で、モノリンガルの L1 習得と比べて継承語との接触機会が限定的であるという点は L2 習得とも共通する。L2 習得の最終到達度（ultimate attainment）において身につける L2 習得のレベルには、習得開始年齢（Age of Acquisition/Arrival, AOA²⁾）が影響するという成熟的制約（maturational constraints）の存在が知られているが（Long, 1990）、成熟的制約は L1 喪失（attrition）にも関係する（Bylund, 2009）。より具体的には、AOA が低いほうが L2 能力を身につけるには有利である一方で、AOA（＝移住などの結果、L1 との接触が減った年齢）が低いほうが L1 喪失の程度や可能性が高く

なるということになる。継承語話者は、子ども時代に国境（言語圏）を越えた移動³⁾をすることで、新しい言語を L2 として習得しながら、誕生時から家庭内で身につけた L1 を保持・喪失することになる。なお、AOA によって継承語話者が移住時点で身につけている継承語能力の程度は異なる。本研究においても、日本移住後も保持した結果の継承語能力なのか、日本に住みながら習得した結果なのかを明確に見極めることは困難なため、習得・保持の両方の可能性を考える。マイナスなイメージの伴う喪失という用語は、先行研究への言及以外では避ける。

Paradis (2023, p.811) は、バイリンガル話者の言語能力は（モノリンガル話者とは）異なっている（= bilingual difference）ことはあっても、バイリンガル話者の能力が劣っている（= bilingual deficit）という考え方からは脱却が必要であることを論じている。その上で、継承語バイリンガルの一人一人の言語能力が異なるのであれば、その違いを生み出す要因に注目する必要性を唱えており、個人差要因を内的要因と外的要因に分類している。内的要因には、AOA や認知能力、社会情緒的な健やかさ（socio-emotional wellbeing）があり、外的要因には、L2 や継承語のインプットや使用環境に加え、保護者の言語能力や社会経済的状況（socio-economic status）などを含めている。本研究においても、Paradis (2023) の個人差要因の一部に注目をし、CHL 一人一人の継承語能力とその言語背景について、量的、及び質的に検証する。

日本国内でも、継承語能力を調査する研究は積み重ねられてきたが、作文力や会話力など総合的な言語能力を対象とした研究が多く（生田, 2006; 櫻井, 2018; 西川, 2011; 真嶋, 2019 ほか）、また、大半の研究が成長過程にある子ども（主に小中学生）を調査対象としている。一方で、近年、日本で育った外国ルーツの若者を対象者とし、継承語の認識や情意面を扱った研究も増えてきているが（太田, 2021; 呉, 2025; 中家, 2024 ほか）、調査対象者 1 名のみのケーススタディ的研究が多く、言語能力そのものに焦点を当てた研究ではない。小川 (2025) は、大学入学後の 5 名の大学生の継承語能力の変化を縦断的に調査した研究だが、言語能力は自己評価と標準化された中国語テストによるものである。継承語の個別の言語項目に焦点を当て、しかも成人の CHL を対象とした研究としては、平川ほか (2017) が貴重な例であり、CHL の中国語関係節の理解・産出を実験的に調査している。5 ～ 9 歳で来日した CHL 4 名（調査時は成人）は、理解実験では中国語母語話者と同様に 100% の正答率であり、産出実験では回答傾向に母語話者との違いが少々見られるものの、明確に誤用だと言える回答は報告されていない。また、CHL の言語背景については、来日年齢や滞日歴などの基本情報のみの報告である。そこで、本研究では、平川らの研究と同様に、特定の言語項目に焦点を当て、日本で育った CHL の中国語能力を実験的に調査する。数ある言語項目の中で、本研究が「動詞・名詞コロケーション」を調査対象とする理由は次の通りである。まず、近年、言語習得研究全般において、語と語の結びつきに関するコロケーションの習得が注目されている（Szudarski, 2023）。コロケーションは上級レベルの学習者にとっても習得が難しいことが知られており（Laufer & Waldman, 2011 ほか）、日本生まれ・育ちの L2 日本語の子ども、つまり、本研究の対象者である CHL と同じ背景を持った子どもたちにとっても日本語の「名詞・動詞コロケーション」の習得が難しいことが報告されている（西川・青木, 2018）。本研究では、高い能力を持つ継承語話者にとっても、継承語の一部のコロケーションは難しい可能性があると考ええる。さらに、西川・青木 (2018) の研究で用いられた日本語版テストに対応させた中国語版のテスト（王・西川, 2022）が利用可能であったことも本研究がコロケーションに焦点を当てる理由の 1 つである。

3. 研究課題

本研究では、日本国内で中国語を継承語として育った話者（CHL）を対象とし、以下の研究課題（Research Question, RQ）を検討する。CHL、及び比較対象とする成人中国語母語話者（Chinese Native Speaker, CNS）共に、調査時には成人である。

RQ1：CHL は、中国語の「動詞・名詞コロケーション」をどの程度産出できるか。

RQ1-1：CHL の産出の正確さは、CNS と比べてどの程度か。

RQ1-2：CHL の誤答には、どのような特徴が見られるか。

RQ2：CHL の言語背景は、中国語の「動詞・名詞コロケーション」の産出能力とどのような関係があるか。

4. 研究方法

上記 2 つの RQ を検証するために、本研究では「動詞・名詞コロケーション」の産出テスト、及び言語背景の詳細を問う質問紙をオンラインで実施した⁴⁾。産出テストは口頭で回答を求めるものである。手順の説明や質問紙への回答は日本語で行われたため、中国語の読み書き能力は求められていない（4.2 で詳述）。調査には、オンライン実験プラットフォーム（<https://gorilla.sc/>）を使用しており、対象者は自分の都合の良い時間・場所で調査に参加した。研究者らと調査対象者が（オンライン上でも）顔を合わせることはなかった。

4.1 対象者

メールや SNS を中心とした調査の呼びかけに自主的に応じた、計 30 名⁵⁾の CHL が本研究の分析対象者である。全員が（1）調査時 18 歳以上、（2）日本生まれ、あるいは中学生（15 歳）以下の年齢で家族と共に日本に移住しており、（3）中国語圏出身の親を持つ⁶⁾。中国語が全くできなくても調査には参加可能であることを募集時に明示しており、本人の中国語能力は参加条件には含まれていない。30 名の CHL の調査時の年齢は平均 23.53 歳（標準偏差（SD）5.28 歳、範囲 18 ～ 36 歳）、来日年齢は平均 6.20 歳（SD6.09 歳、範囲 0 ～ 14 歳）、日本在住年数は平均 16.20 年（SD7.27 年、範囲 6 ～ 32 年）である。家庭で用いられていた中国語は、北京語 18 名、上海語 6 名、広東語 2 名、福建語 7 名、その他 3 名、不明 3 名である（複数回答可）。CNS の 15 名は、王・西川（2022）のデータを用いる。CNS は全員、日本語学習経験はない。なお、CNS もオンライン調査だが、CHL が口頭回答であるのに対し、CNS は文字解答である。

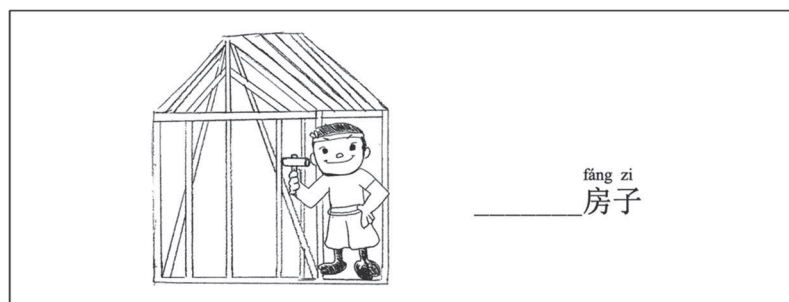
4.2 「動詞・名詞コロケーション」の産出テスト

本研究で用いる中国語「動詞・名詞コロケーション」テストは、西川・青木（2018）の日本語版テストを翻訳し、子どもの CHL への調査を念頭に作成されたものであり、日本語版テストと同様に、動詞部分の産出を求めるテストである。その作成過程は王・西川（2022）に詳細に報告されており、CNS、及び日本語を母語とする成人中国語学習者（Japanese Chinese Learner, JCL）を対象にパイロット調査が行われている。一部のアイテムについては CNS の正答率が低く、翻訳過程で生じたと思わ

れる問題が、著者自身によって指摘されているため、本研究でも分析時に考慮する。

中国語版テストには、日本語版と同じ 70 アイテムが含まれる⁷⁾。イラストが提示され、漢字（簡体字）とピンインで示された名詞部分に合うように、下線で示された動詞部分を口頭で産出するようになっている（図 1 参照）。家庭での日常会話を通して中国語を習得した CHL の中には、中国語の読み書きができない者がいることも想定されていたため、名詞部分を音声で示すことも検討した。しかし、中国語の統語構造（動詞－目的語）の性格上、多くのアイテムで動詞が先に来ることは避けられず、名詞部分は文字での表記とせざるを得なかった。ただし、全員が中国語版テストの前に、日本語版テストに回答しており、各イラストが表す内容は理解していたと考える。なお、本稿の分析には含めていないが、本研究では反応時間（Response Time, RT）も測っている。正答時の平均 RT は 2 秒程度であり、回答時に辞書などで答えを調べる時間的余裕はなかったと考える。

図1 アイテム例「（建）房子“家を（たてる）”」



採点基準は王・西川（2022）に倣い、判断を迷うものについては、筆頭著者と中国語母語話者である共著者 2 名が協議の上、正誤の扱いを決めた⁸⁾。テスト作成時に想定している模範解答（王・西川，2022, 表 2）以外にも、イラストの描写、及び中国語の表現として自然な回答は正答として扱っている。例えば、図 1 のアイテム例の場合、想定された動詞は「建」だが、「（建／造／搭／盖／建造）房子」のいずれの動詞も正答とした。また、中国語の地域差についても、本稿の共著者 2 名（それぞれ北京語、湘語の母語話者）の判断に加えて、コーパスや Web 検索で用例確認をしたり、他地域出身の話者の意見も取り入れたりして、できる限りの配慮をしたうえでの採点を行った。

4.3 質問紙

成長の過程で多様な言語環境に置かれていたと考えられる CHL の背景を詳細に把握するために、本研究の質問紙作成に当たっては、継承語話者・バイリンガル話者の言語背景を把握するための複数の質問紙を参照した⁹⁾。質問は 50 アイテムだが、そのうち 19 アイテムは、バイリンガルの言語優位性（language dominance）を測るための Bilingual Language Profile（BLP, Birdsong et al., 2012）と呼ばれる質問紙の項目である。BLP の 19 アイテムは、言語習得歴、言語使用、習熟度、言語への態度の 4 つの下位指標に分類されている。各言語の最大ポイントは 218（4 つの下位指標の合計）で、中国語から日本語の引き算で優位性スコアを計算し、正の値は中国語が優位、負の値は日本語が優位であると判断できる。

BLP 以外に本研究の質問紙に含まれている項目としては、国籍や名前（日本語名か中国語名か）、

父母の日本語力、父母と話す際の言語（就学前、小学校・中学・高校時代、現在）、父母の最終学歴、兄弟姉妹の有無、中国語や日本語の学習歴や資格、本人が考える得意な言語の順番などがある¹⁰⁾。主に言語環境や本人のアイデンティティに関連する項目である。

5. 結果と考察

5.1 CHL の中国語「動詞・名詞コロケーション」産出能力 (RQ1-1)

表1はCNSとCHLのコロケーションテストの得点の平均値と標準偏差、範囲である。平均点では、CNSが20点近く上回るが、CHLは個人差が非常に大きい（SDも非常に大きい）。本研究ではCNSを絶対的な基準としている訳ではないが、参考としてCNSとCHLの得点差を確認した。2群の分散が等しいかどうかをLevene検定により確認したところ、 $p<.001$ であり、分散が異なることが確認された。そこで、対応のないWelchの t 検定を行った結果、グループ間の比較において、CHLの得点はCNS（王・西川, 2022）より有意に低いことが分かった（ $t(33.14) = 4.21, p<.001, d=0.95$ ）。

表1 CNSとCHLのコロケーションテストの得点（最大値70）

グループ	人数（名）	平均値（点）	標準偏差	範囲（点）
CNS	15	62.60	4.34	53～68
CHL	30	45.27	22.25	0～69

CHLの得点範囲は0からほぼ満点まで非常に幅がある。より多くのCHLが正答を得た、CHLが得意なアイテムに注目すると、正答率が80%より上¹¹⁾のアイテムは10個あり、「1. 看书（本をよむ）」「3. 在公园跑步（公園ではしる）」「12. 妈妈送给孩子礼物（お母さんが子どもにプレゼントをあげる）」「37. 妈妈送给我礼物（お母さんが私にプレゼントをくれる）」「42. 坐在椅子上（椅子にすわる）」「59. 在公园走路（公園であるく）」などであった¹²⁾。1、3、42、59番はテスト作成時に、回答時のモチベーションを維持する目的で含められた（どの言語でも）比較的簡単な動詞である（西川・青木, 2018, p.41）。授受表現については、中国語では日本語のような視点制約がなく（「あげる」と「くれる」はどちらも中国語では「送给」）、日常的に用いる語として正確に身につけているのだと考えられる。

以上では、CHLのコロケーション産出能力を統計的に確認した。次節では、この結果を補足し、誤答の背景原因を質的に明らかにするため、CHLが苦手とするアイテムとその誤答の傾向を分析する。

5.2 CHL が苦手とするアイテムと誤答の傾向 (RQ1-2)

CHLが苦手とするアイテムについては、CHLの正答率が66.67%（CHL30名中20名が正答）以下の30アイテムに絞って検討する（表2）。その際、王・西川（2022）が指摘したように、日本語のテストを中国語に翻訳したことなどが原因で、CNSの正答率が低いアイテムもあるため、CNSの正答率が80%以下のアイテムは除外した。紙幅の都合上、表2にはCHLの正答率のみを示し、CNSの正答率は王・西川（2022, 表2）を参照されたい。

表2 CHLが苦手とする30アイテム（模範解答例）と正答率（昇順）

アイテム	正答率	アイテム	正答率
30. 打泡沫（泡を <u>たてる</u> ）	36.67%	16. 往签子上串鱼（串に魚を <u>さす</u> ）	63.33%
63. 解扣子（ボタンを <u>はずす</u> ）	36.67%	24. 树被风吹倒（木が風で <u>たおれる</u> ）	63.33%
68. 解鞋带（靴ひもを <u>ほどく</u> ）	36.67%	33. 从椅子上站起来（椅子から <u>たつ</u> ）	63.33%
17. 把衣服挂到衣架上（ハンガーに服を <u>かける</u> ）	43.33%	35. 2乗3（2に3を <u>かける</u> ）	63.33%
20. 洗牌（トランプを <u>きる</u> ）	53.33%	54. 撒盐（塩を <u>かける</u> ）	63.33%
56. 蒸米饭（ご飯を <u>たく</u> ）	53.33%	55. 在台阶上摔倒（階段で <u>ころぶ</u> ）	63.33%
25. 摘眼镜（眼鏡を <u>とる</u> ）	56.67%	64. 摘帽子（帽子を <u>とる</u> ）	63.33%
5. 插插座（コンセントに <u>さす</u> ）	60.00%	15. 建新房子（新しい家が <u>たつ</u> ）	66.67%
10. 系扣子（ボタンを <u>かける</u> ）	60.00%	19. 系头巾（はちまきを <u>しめる</u> ）	66.67%
34. 划船（ボートを <u>こぐ</u> ）	60.00%	22. 用手指黑板（指で黑板を <u>さす</u> ）	66.67%
39. 拉雪橇（そりを <u>ひく</u> ）	60.00%	32. 弹钢琴（ピアノを <u>ひく</u> ）	66.67%
60. 抽签（くじを <u>ひく</u> ）	60.00%	48. 点眼药水（目薬を <u>さす</u> ）	66.67%
65. 划线（線を <u>ひく</u> ）	60.00%	50. 建房子（家を <u>たてる</u> ）	66.67%
66. 插旗子（旗を <u>たてる</u> ）	60.00%	52. 打伞（傘を <u>さす</u> ）	66.67%
14. 拉网（網を <u>ひく</u> ）	63.33%	58. 系鞋带（ひもを <u>むすぶ</u> ）	66.67%

表2の30アイテムの特徴として、まず注目されるのは、複数の異なるアイテムに対応する動詞が、日本語では同一動詞で表現されることである。例えば、中国語では「32. 弾」「14.&39. 拉」「60. 抽」「65. 划」の異なる4つの動詞が用いられる場面は、日本語では全て「ひく」で表現される。同様に、5つのアイテム（「5. 插」「16. 串」「22. 指」「48. 点」「52. 打」）は全て日本語の「さす」、4つのアイテム（「10. 系」「17. 挂」「35. 乗」「54. 撒」）は全て日本語の「かける」で表せる。これらは、日本語と比べ使い分けがより細分化されているアイテムである。つまり、日本語では多義動詞として同じ動詞で多様な場面を表すのに対し、中国語では場面ごとに異なる動詞を使い分ける場合、CHLにとって習得・保持が難しいようである（表3の誤答パターン③も参照）。

続けて、CHLの誤答の傾向を確認するため、誤答をパターンに分けて分析した。誤答パターンは、王・西川（2022, 表4, 5）を基本としたが、中国語として自然な回答のうち「形容詞か名詞になっている」パターンは本研究では4例と少なかったため、「イラストの解釈のずれ」というパターンと統合した。さらに、中国語として不自然な回答について、「④意味が似ている動詞の混同」「⑤軽動詞¹³⁾の過剰使用」「⑥補語¹⁴⁾に関する誤用」の3パターンを新たに加え、最終的に7パターンに分類した。分類作業は、著者のうち中国語母語話者の2名がそれぞれ独立して行い、一致率は82%であった。不一致箇所については、2名の協議により決定した。分類結果は表3に示す。なお、CNSの誤答パターンの詳細については王・西川（2022, 表4）を参照されたい。

表3 CHLの誤答パターンと誤答例（総回答数：70問×30名=2100例）

誤答パターン		数	%	誤答例
①分からない／パス／無回答		481	64.82%	
②中国語として自然だがイラストの解釈にずれ		74	9.97%	35. 2乗3 (2 <u>かける</u> 3) →加 (たす)
中国語として不自然	③日本語の転移だと考えられる誤答	25	3.37%	60. 抽 <u>签</u> (くじを <u>ひく</u>) →拉 (ひく)
	④意味が似ている動詞の混同	40	5.39%	63. 解扣子 (ボタンを <u>はずす</u>) →开／打开 (あける)
	⑤「做、搞 (する、やる)」のような軽動詞の過剰使用	13	1.75%	50. 建房子 (家を <u>たてる</u>) →做 (する、つくる)
	⑥補語に関する誤用	17	2.29%	33. 从椅子上 <u>站起来</u> (椅子から <u>たつ</u>) →站 (たつ)
	⑦上記以外の不自然な回答	92	12.40%	39. 拉雪橇 (<u>そり</u> を <u>ひく</u>) →闭 (閉じる)
合計（全誤答数）		742	100.00%	

注：下線は目標とする模範回答、（ ）内は日本語訳

表3に示したように、7種の誤答パターンのうち、最も多かったのは①分からない／パス／無回答で、481例（全誤答数の64.82%）が確認された。これに対し、CNSでは同パターンは4例のみであった。CNSの場合、イラストの分かりにくさがあったとしても、何らかの動詞を用いて表現しようとするのに対し、CHLの場合、他の動詞も思い浮かず、回答を諦めてしまっている可能性も高い。CHLでは、例えば、「34. 划船（ボートをこぐ）」「63. 解扣子（ボタンをはずす）」「68. 解鞋带（靴ひもをほどく）」「17. 把衣服挂到衣架上（ハンガーに服をかける）」「20. 洗牌（トランプをきる）」などで、パターン①が多く見られた。CHLは主に家庭場面で継承語を用いていることを想定すると、「划（こぐ）」のように家庭場面での使用頻度が低い動詞が難しいことは容易に想像がつく。ただし、表2を見る限り、家庭場面で用いることがありそうな動詞でも苦手なものも多く、場面要因だけで説明することは難しい。「解（はずす、ほどく）」「挂（かける）」のような動詞については、次に述べるパターン③や④とも関連する難しさがありそうだ。

パターン②中国語としては自然だがイラストに描かれた動作と異なる誤答は、74例（全誤答数の9.97%）確認された。CNSではこのパターンが80例と最も多かった。原因としては、王・西川（2022）が指摘しているように、回答時の不注意のほか、イラストや静止画から動詞を連想させる研究方法自体の限界も考えられる。

続いて、中国語として不自然な回答について、パターン③日本語の転移の可能性があると思われる誤答が25例（全誤答数の3.37%）確認された。当然ながら、この誤答パターンはCNSには見られない。このパターンの誤答は、表2のアイテムについて議論したように、「ひく」「さす」「かける」「きる」などの日本語の多義動詞に対応するアイテムで顕著に見られた。このような多義語は、日本語と中国語で共有する語義もあれば、対応しない語義もある。対応しない語義について、CHLが日本語の既有知識を中国語に過剰一般化した結果、誤答が生じたと考えられる。例えば、中国語の「拉」は

「引っ張る」などの語義では「ひく」と対応し、「60. 抽签 (くじをひく)」や「65. 划线 (線をひく)」には対応しないが、そこで「拉」という誤答が見られた。

次に、パターン④意味が似ている動詞との混同による誤答は 40 例 (全誤答数の 5.39%) 確認された。例えば、「63. 解扣子 (ボタンをはずす)」と「68. 解鞋带 (靴ひもをほどく)」では「开／打开 (あける)」という誤答が見られた。また、パターン⑤「做、搞 (する／やる)」のような軽動詞の過剰使用は 13 例 (全誤答数の 1.8%) であり、特に「50. 建房子 (家をたてる)」に対しては 4 人が「做 (する、つくる)」と回答した。これは、CHL が「解」や「建」などの動詞を知らず、既知語で補おうとした結果と考えられる。実際、CNS ではパターン④に相当する誤答が 3 例にとどまり、パターン⑤は見られなかった。この未知語を既知語で代用する傾向は、パターン⑦他の不自然な回答 (92 例) にも見られた。ただし、パターン④と⑤の誤答はある程度イラストの表す意味が伝わるのに対し、パターン⑦は意味が伝わらない点で異なる。

最後に、パターン⑥補語に関する誤用は 17 例 (全誤答数の 2.3%) 確認された。例えば、「33. 从椅子上站起来 (椅子からたつ)」に対して「站」のみでの回答が見られた (「起来」が脱落)。中国語の「站」は日本語で「たつ」と訳すことが多いが、椅子から立ち上がる場面では、補語の「起来」と結合しなければ不自然になる¹⁵⁾。そのため、CHL は日本語の感覚で「站」を単独で用い、動作の方向を表す補語「起来」を産出しなかったと考えられる。

以上の分析から、CHL が苦手とするアイテムや誤答の傾向については、次のように言える。まず、多義語の語義対応のずれや補語表現において誤用が多く見られた。次に、イラストの動作を表現するにふさわしい動詞を思いつかない場合に、既知語や軽動詞で代用する傾向が見られた。西川・青木 (2018, p.152) は L2 日本語で難しいコロケーション習得について、日本語の使用場面の偏り (= L2 日本語の子どもが家庭では日本語を使用していない) が関係する可能性を述べている。継承語に関しては、反対に家庭場面で用いる表現が得意で、家庭内で用いない表現を苦手とする可能性を考えたが、本研究では明確な傾向は見られなかった。

5.3 CHL の言語背景と中国語の「動詞・名詞コロケーション」の産出能力の関係 (RQ2)

本節では、CHL のコロケーションテストの得点と言語背景の関係を検証する。テスト得点の正規性を Shapiro-Wilk 検定により確認したところ、 $W=0.84, p<.001$ となり、正規分布していなかったため、スピアマンの相関分析を実施した。まず、CHL のテスト得点と AOA との相関係数は、 $\rho = .74, p<.001$ で有意な強い正の相関が見られ、滞在年数 (Length of Residence, LOR) との相関係数も、 $\rho = -.62, p<.001$ と有意な中程度の負の相関が見られた。図 2 は CHL の得点と AOA の相関、図 3 は CHL の得点と LOR の相関の散布図、及び回帰直線である。なお、図中の 53 点のラインは CNS の最低得点である。

図2 CHLコロケーションテスト得点とAOAの関係

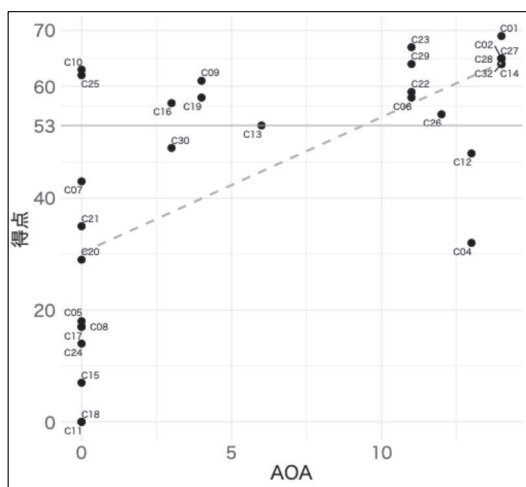


図3 CHLコロケーションテスト得点とLORの関係

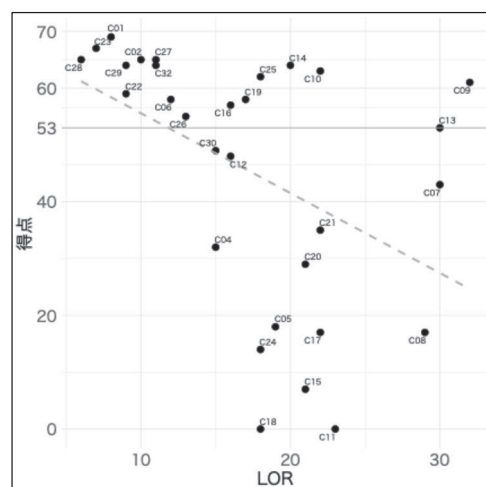


図2のAOAとテスト得点の関係では、有意な正の相関が見られたことから分かるように、全体的な傾向として、AOAが高くなるほど得点も高くなっている。一方で、日本生まれあるいは6歳以下という低年齢で来日したCHLであっても、CNSの得点範囲に入っているCHLが見られる(C09, C10, C13, C16, C19, C25)ことも注目に値する。また、図3のCHLの得点とLORの相関の散布図では、有意な負の相関が見られたことが示すように、LORが短いほど得点が高く、中国語コロケーションの産出能力が高いことが分かる。ただし、AOAとLORの間にも有意な負の相関が確認されたため($\rho = -.70, p < .001$)、偏相関分析を行ったところ、LORを統制してもAOAと得点には有意な正の偏相関が認められた($\rho = .54, p = .002$)。一方、AOAを統制した場合、LORと得点の偏相関は有意ではなかった($\rho = -.21, p = .27$)。これらの結果から、CHLのテスト得点と関係するのはAOAのみであり、LOR単独では関係しないと結論付けることができる。本研究と同じく成人継承語話者を対象としたCarreira and Kagan (2011, pp.48-50)は、継承語能力とAOAの強い関係を報告しているが、本研究のCHLの中国語コロケーションの産出能力でも同様の結果が確認された。また、Bylund (2009)は、L1喪失にもL2習得と同様に成熟的制約があり、12歳前後で喪失のしやすさに変化が生じると述べている。本研究では、AOAが12歳以上のCHLは2名(C04, C12)を除いてCNSの得点範囲内であり(図2)、Bylundの主張を支持する結果であった。

次に、コロケーションテストの得点とBLPの言語優位性スコアならびにBLPの4つの下位指標との相関関係について分析した。表4の優位性スコアは、中国語から日本語を引き算したもの、下位指標は中国語のみのスコアである(4.3も参照)。各項目が取りうる数値範囲は、優位性スコアが-218～218、言語習得歴・習熟度・言語への態度が0～54.48、言語使用が0～54.5である。

表4 CHLのBLP言語優位性スコア（中国語－日本語）と下位指標（中国語のみ）

	優位性スコア	言語習得歴	言語使用	習熟度	言語への態度
平均値	-41.82	29.03	19.55	33.29	33.22
標準偏差	99.39	10.62	16.64	18.29	20.29
範囲	-188.43~120.60	9.08~44.49	0~49.05	0~54.48	0~54.48

図4 CHL中国語コロケーション得点と
言語優位性の関係

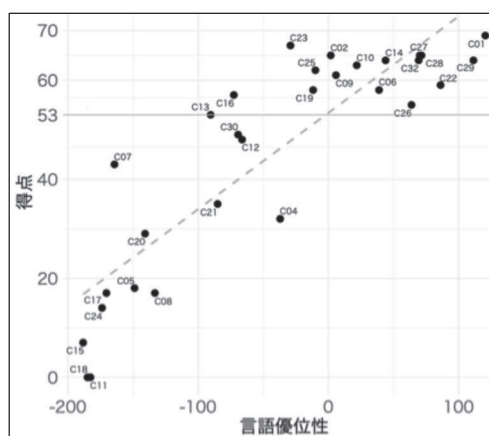
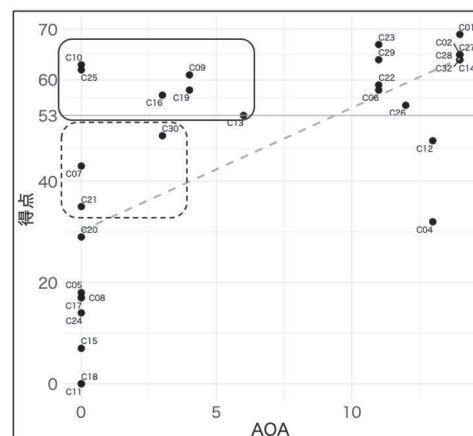


図5 CHL中国語コロケーション得点とAOAの関係
(図2の再掲)



テスト得点は、言語優位性スコア ($\rho = .87, p < .001$)、BLP 下位指標のいずれとも有意な強い正の相関が確認された（言語習得歴, $\rho = .75, p < .001$; 言語使用, $\rho = .81, p < .001$; 習熟度, $\rho = .91, p < .001$; 言語への態度, $\rho = .82, p < .001$ ）。BLP の言語習得歴に関する質問項目は、中国語習得開始年齢、中国語を使用する学校・職場・家族との経験年数など、累積的なインプット量をきめ細かく測る質問項目となっている。BLP の言語習得歴と得点の強い正の相関は、累積的なインプットの量と中国語コロケーションの産出能力の強い関係を示している。また、言語使用についての質問項目は、家庭・職場や学校・友人との間での、調査時における中国語の使用割合についてであった。このことから、現在の中国語使用の割合も産出能力と強く結びついていると言える。習熟度についての質問項目は、「話す」「聞く」「読む」「書く」の中国語の四技能の自己評価に関するものであり、中国語能力の自己評価と中国語コロケーションの産出能力の強い関係を意味している。また、言語への態度についての質問項目は、中国語を話している時に自分らしく感じるかどうかや、中国語が母語話者レベルであることに対する認識などの、アイデンティティについてである。中国語に対する肯定的な心的態度と産出能力の強い結びつきが分かった。

言語優位性スコアとテスト得点間の有意な強い正の相関は上述の通りだが、中国語優位 CHL の実際の得点を見ると、両者の関係はさらに明確になる。図4は、テスト得点と言語優位性スコアの関係の散布図である。中国語優位 CHL は言語優位性を示す x 軸においてプラスの値をとるが、全ての中国語優位 CHL が CNS の得点範囲（53 点以上）に入っており、言語優位性スコアとコロケーションテストの得点の強い関係が視覚的にも確認できる。

以上、量的な分析において、CHL のコロケーションテストの得点と AOA、言語優位性スコア、BLP 下位指標には有意な相関があることが明らかになった。しかし、AOA が低いにもかかわらず、

高い得点をとっている CHL も確認されることは先に述べた通りである。ここでは、今後の CHL の継承語教育についての示唆を得ることも視野に入れ、このような例外的な CHL の AOA 以外の言語背景について詳しく検討する。

図 5 の実線の四角枠内は AOA が 6 歳以下の CHL のうち、CNS の得点範囲の CHL、点線の四角枠内は CNS の得点範囲には入っていないものの、回帰直線以上の得点をとった CHL である。これら高い得点をとった CHL が持つ AOA 以外の言語背景について検討する。まず、C10、C21、C25 は、日本生まれであるが、誕生後の一時期中国に帰国している。C10 は小学 5 年生までは中国の学校で教育を受け、再来日後も中学卒業まで中華学校に通い、中国語による教育を受けている（その後、日本の高校を卒業）。C21 は生まれてすぐ中国へ帰国し、8 歳で再来日し、日本の学校に通っていたものの、東日本大震災が起きたことからまた中国へ帰国し、11 歳になるまで中国で教育を受けた。C25 は生まれてすぐ中国へ帰国し、小学 4 年生の前期まで中国で教育を受けた。このように、AOA が低いにも関わらず高い中国語コロケーション得点をとった CHL の中には、中国の教育経験を持っているケースがあった¹⁶⁾。

また、家庭の中国語学習経験も高い中国語コロケーション産出能力の重要な要因となっているようである。ここでは、家庭の中国語学習経験を、親からの中国語の指導のみに限定せず、親の方針で中国語教室に通わせ、中国語を学んだ経験なども含む。C09 は、質問紙の回答に「親が中国語を、中国の教科書を使って教えてくれた。小学校～高校まで。そのあとは自分で本などを読んだりしている」とコメントを書いている。また、C19 は保育園の時は中国語の絵本を読んでおり、小学高学年～中学生にかけて 5 年間、塾に通って中国語を学んだという。C30 は、小学生の時、母親と一緒に中国の教科書の音読を行っていたということだった。このように、家庭の教育方針により子どもに中国語学習を行わせることがコロケーション産出能力と関係していることが分かるが、家庭の中国語学習や、中国語教室での学習経験は、高い得点の CHL に限らない。しかし、回帰曲線よりも低い点数の CHL の場合、中国語学習期間が一時的なものであったり、就学前であったりするケースがほとんどであった。よって、家庭の方針により行われる中国語学習は、小学校入学以降も継続して行われることが、高い中国語コロケーション産出能力に結びついているようであった。

次に、留学を含む成人以降の中国滞在経験（C07、C13、C19）も重要な言語背景であるように思われる。C07 と C19 は、大学時に 1 年間の中国留学経験がある。C07 は日本生まれで、家庭では一貫して日本語を使用してきたという経歴を持ち、大学生になるまで中国語を習った経験もない。家庭使用言語は調査時においても日本語だが、留学後は親とのメールのやり取りでは中国語を使用するようになったという。C13 は 20 代後半で中国に滞在した経験がある。このような成人してからの中国滞在経験も中国語コロケーション産出能力と関係しているようであった。

最後に、家庭での中国語使用にも目を向けると、AOA が 6 歳以下の CHL の中で、成長の過程を通して両親と中国語のみ使用しているのは C10、母親と中国語のみ使用しているのは C30（父親とは両言語使用）、父親と中国語のみ使用しているのは C16（母親とは両言語使用）である。C10 は中国の教育経験、C30 には家庭の中国語学習経験があるが、C16 は家庭での中国語使用以外に目立った要因が見られない。これは家庭で片親とでも中国語のみを使用し続けることが重要な要因となっていることを示唆していると思われる。一方で、家庭において日中両言語を使用しているのは、C09、C13、C19、C25 である。図 5 の実線の四角枠に入っている CHL の中で、親と日本語しか使用していない

人は見られず、点線の四角枠の CHL の中で、両親と日本語のみを使用しているのは C07 のみであった（上述の通り、C07 は留学経験がある）。このように、AOA の低い CHL にとって、家庭での中国語使用は、中国語のコロケーションの習得・保持に重要な要因であることが確認された。

Montrul (2016, pp.298-299) は、書き言葉を含めた L1 での教育の継続があれば、L1 を喪失しにくいと述べているが、本研究においても中国の教育経験、家庭の中国語学習経験が中国語コロケーションの産出能力の習得・保持の重要な要因となっていた。また、Hollebeke et al. (2020) によると、マルチリンガル家庭は、子どもの言語環境の形成に関する決定を迫られ、ファミリー・ランゲージ・ポリシー (Family Language Policy: 家族が言語使用をどのように捉え、組織化するか) を形成する。継承語である中国語を、親が子どもに教えることや、中国語の塾に通わせることは、子どもが継承語である中国語を話せるようになることが望ましいという家族のビリーフのもとに行われていると考えられる。さらに、家庭で使用される言語の選択にも、家族のビリーフが影響している可能性がある。実際、CHL の親の中には、ネイティブレベルの日本語力を持ちながら、家庭において日本語のみではなく、両言語を使用している人もいる (C20 の母親、C30 の父親)。このようなファミリー・ランゲージ・ポリシーも、CHL の中国語コロケーション産出能力に関わっていると言えるだろう。

6. まとめと今後の課題

本研究では、日本国内で育った成人 CHL を対象に、継承語である中国語の「動詞・名詞コロケーション」の産出テストを実施した。その結果、CHL の得点幅は、0 点からほぼ満点まで、非常に個人差が大きいことが明らかになった (RQ1-1)。次に、苦手なアイテムや誤答の傾向については、CHL は日本語と中国語の間で意味範囲や語法の異なるコロケーション (動詞) を苦手とし¹⁷⁾、また、意味の似た動詞を本来の意味よりも拡張させて用いる傾向も見られた。これらは CNS の基準では誤用として判断されるものの、その一部は十分に意味の通じるものであり、CHL が限られた使用語彙の範囲内で何とか表現しようとしている姿が反映されたものとも言える (RQ1-2)。CHL の中国語コロケーション産出能力の個人差を説明する要因 (RQ2) については、まず、LOR ではなく AOA が CHL の得点に強く関係することが明らかになった。AOA が高いほうが、より高い中国語能力を保持している明確な傾向がある一方で、日本生まれや低年齢で来日した CHL の中にも例外的に高い中国語能力を持つ CHL が存在し、その背景には中国での学校教育経験や中国語の学習経験、家庭における中国語使用があることが示された。ただし、本研究は量的アプローチを主とし、質的なデータも質問紙の回答に限られているため、CHL が成長の過程でどのように中国語と向き合ってきたのかを把握するには限界がある。今後は、本研究のように中国語能力を客観的に把握した上で、CHL の言語背景を質問紙だけでなくインタビューのような方法でさらに掘り下げる研究も必要であろう。また、例外的に高い中国語能力を持つ CHL を取り出した上で個人差要因の詳細を検証しているため、先行研究で取り上げた Paradis (2023) の内的要因・外的要因のうち、質問紙に含まれながらも十分に検討ができていない要因もある。

本研究では、継承語能力を実際に測定する際、対象を「動詞・名詞コロケーション」に絞ったことで、CHL が中国語の習得・保持において言語的にどのような課題を抱えているのかを具体的に明らかにすることもできた。ただし、本研究で用いた王・西川 (2022) のテストが日本語版テストを翻

訳したものである点は、課題として残る。この点に関しては、本研究の CHL は日本語の名詞・動詞コロケーションテストにも回答しており、両言語版が完全に同等とは言えないまでも、二言語で同じコロケーションを調査することを可能にしているという利点もある。

現地語である日本語からの干渉や、語の意味を拡張し過ぎた結果の誤用などは、CHL 自らが職業や学術的な場で求められる正確な中国語能力を身に付けたいと考えた時に、継承語学習・指導のポイントになるとも考えられる。さらに踏み込めば、大学での第二外国語としての中国語教育などへの応用を考える際には、CHL と JCL の区別についても考える必要がある。王・西川 (2022) の JCL の回答でも、本研究で観察された CHL と同じ誤用の傾向が報告されている。例えば、「09. 沥水(水をきる)」に対して「切 (きる／カットする)」と回答した日本語の転移による誤答、「63. 解扣子 (ボタンをはずす)」に対して「打开 (あける)」と回答した意味が似ている動詞の間違い、「30. 打泡沫 (泡をたてる)」に対して「做 (する、つくる)」と回答した軽動詞の過剰使用による誤答、「55. 在台阶上摔倒 (階段でころぶ)」に対して「倒」のみで回答した補語に関する誤用などである。今後は、日本語と中国語の2つの言語背景を有している CHL と JCL の共通点だけではなく、相違点にも目を向けることで、CHL と JCL が共に学ぶ大学などでの効果的な中国語教育の在り方を考えていくこともできるだろう。例えば、Montrul (2016) は、継承語の言語的特徴の一つとして継承語話者の発音の良さに触れている。今回は分析対象にしていないが、口頭産出された CHL の回答においては、発音面の個人差も見られた。本プロジェクトでは、コロケーションテストの他に、談話レベルでの中国語発話のデータも収集しており、語彙、形態素、統語、音声面など言語の異なる側面について CHL の特徴を明らかにすることも興味深い。

また、今回は完全オンライン調査であったため、成人のみを対象としているが、成長過程にある子どもを対象に同様の調査を行うことも、それらの子どもたちへの継承語教育の参考になると考える¹⁸⁾。特に子どもの場合、継承語教育の目的は個別の言語項目の学習の積み重ねよりも、成長に合わせた認知的思考を支える言語能力の発達に重きが置かれるべきである。そのことは認めた上で、指導者側が子どもの苦手な言語項目を把握しておくことは、教育効果を上げるための要素の一つであると筆者らは考えている。

継承語話者の継承語能力は十人十色であり、継承語を学ぶ動機の有無や程度も人それぞれであろう。しかし、継承語をさらに学びたい、あるいは子ども時代にもっと学びたかったと思っている成人継承語話者も一定数はいるはずである。効果的な継承語教育を行うためには、(主観的・経験的ではなく)客観的に言語能力を精査した基礎研究も有益である。また、本研究が示した個人差要因の一部は、本人や家族の努力によって、幼少時からの継承語の学習環境として整えることが可能である。本研究が、継承語教育を必要とする人々の一助となれば幸いである。

謝辞・付記

本研究の調査に参加してくださったみなさま、及び参加者の募集にご協力くださったみなさまには、心より感謝申し上げます。本研究は、2024～2027年度科学研究費・基盤研究C「子どもの第二言語習得と習得開始年齢—自然習得での日本語習得の初期段階に注目して—」(課題番号 24K04003、研究代表者・西川朋美)との関連で、テストや質問紙の開発をしています。また、2024～2028年度科学研究費・基盤研究A「やさしい日本語の理念に基づく移民時代の持続可能な多文化社会実現のた

めの総合的研究」(課題番号 24H00088、研究分担者・西川朋美)の補助も受けています。

注

- 1) 本研究では、母語と第一言語はほぼ同義で用いる。第二言語と対比させて考える際には第一言語と呼ぶ。Skutnabb-Kangas (1984, p.18) は、母語の定義には「出自、能力、機能、アイデンティティ」の複数が考えられることを指摘している。本研究の対象者の母語は、定義によって中国語であったり日本語であったりすると考える。
- 2) L2 成熟的制約の研究においては、AOA は、Age of Acquisition (習得開始年齢) や Age of Arrival (入国年齢) の略語として用いられることが多い。L1 喪失の研究においては、入国年齢とは、母国を離れ、L1 との接触が減少する年齢のことである。
- 3) 移民先の国で生まれた第2世代の場合も、家庭から社会(学校など)へと活動の場を広げることによって、言語環境を移動していると本研究では考える。
- 4) 本プロジェクトでは、計5つの言語テストを実施しており、全体で60分程度の所要時間であった。日本語は5つ全ての実施だが、中国語に対応しているのは3つのテストである。その中でコロケーションのテストは難易度が高いほうに位置づけられる。参加者への謝礼は1500円が基本だが、中国語での回答にも挑戦するとインセンティブをつけ、2500円を電子マネーで支払った。CHL 全員が2500円を受け取った。本研究は、筆者らの所属する大学の人文社会科学研究の倫理審査委員会の承認を得て実施されている。
- 5) テストと質問紙に回答した32名のうち、テストのイラストを熟知している1名、及び横から答えを教えてもらっていることが録音から分かる1名は分析から外した。
- 6) 30名のうち27名は両親共に中国語圏出身、残り3名は一方の親は日本人である。
- 7) 全アイテムのイラストは、西川・青木(2018)の巻末資料として掲載されている。
- 8) イラストによっては、動詞にアスペクトマーカ「了」が必須だと考えられる(例: 38. 门关了(ドアがしまる))など文法が関係するアイテムもあったが、本研究では語彙力に焦点を当てているため、文法の違い・不自然さについては、誤答としては扱っていない。
- 9) 米国 National Heritage Language Resource Center のウェブサイトに掲載されていたものを中心に検討していたが、2025年2月時点で該当ページ(<http://www.nhlrc.ucla.edu/data/questionnaires.asp>)にアクセスできなくなっている。
- 10) 本プロジェクトでは、一部、英語も含めた言語テストを実施しているため、父母の英語力や英語学習歴など、英語に関連する質問も含まれている。「得意な言語の順番」は、中国語、日本語、英語の3言語での順番である。
- 11) 王・西川(2022)は、80%以下をCNSの正答率が低いアイテムの抽出の際の基準としている。CNS正答率が80%に満たない場合、アイテム側に問題がある可能性も考える。
- 12) CHLの得意なアイテムの例からも分かるように、本研究のコロケーションテストには、いわゆる自由結合も含まれている。本研究の先行研究(西川・青木, 2018, p.124, 注6)においても、広い意味での「動詞・名詞コロケーション」が研究対象として扱われている。ただし、慣用句は含んでいない。
- 13) 軽動詞(light verb)とは、動詞自体では意味が薄く、名詞などほかの語と結びついて述語を構成する動詞である。英語のtakeや日本語の「する」などがその代表例である。
- 14) 中国語の「補語」とは、動詞や形容詞の後ろに付き、その動作や状態の結果や方向、程度などを補足する成分である。例えば、「掉下来(おちる)」の「下来」は方向補語であり、主動詞の意味を補足的に説明する機能を持つ。
- 15) このパターンの誤用は、移動事象における「経路」の表し方の言語間差という観点から説明できる可能性がある。Talmy (1991) は、経路が主として主動詞で表される言語と、主動詞以外の要素で表される言語があることを指摘した。日本語は前者、中国語は後者の傾向が相対的に強いとされる。
- 16) これらのCHLのAOAを0歳とすることには議論の余地が残るが、本研究では日本での生活が始まった最初の年齢をAOAとしており、他のCHLと異なる傾向を見せる場合は、個別の事例を検討する手法を取る。成長の過程で二国間を行き来したCHLはここで取り上げた3名以外にもいる。
- 17) 日本語からの転移は、日本語テストに先に回答したことによる影響も否めないが、先に回答した日本語テストにも中国語の影響は見られるため、回答順だけが原因ではないと考える。
- 18) 日本語版テストは、小学生や幼稚園児にも実施しているが(西川・青木, 2018)、語順の関係上、目的語名詞の前に動詞を産出する必要がある中国語版テストを、年少者に実施する際の工夫については検討が必要である。

引用文献

- 生田裕子 (2006)「ブラジル人中学生の「書く力」の発達—第1言語と第2言語による作文の観察から—」『日本語教育』128, 70-79.
- 王丹叶・西川朋美 (2022)「中国語「動詞・名詞コロケーション」産出テスト開発の試み—JSLの子どもの母語・継承語での調査に向けたパイロットテスト—」『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究』18, 125-137.
- 太田真実 (2021)「中国語使用に対する意識の変容過程と継承語教育のあり方—幼少期に中国から来日した若者のライフストーリーをもとに—」『ジャーナル「移動する子どもたち」—ことばの教育を創発する』12, 74-91.
- 小川典子 (2025)「継承中国語学習者の言語能力—中国ルーツの大学生への縦断調査から—」古川裕教授榮退記念中国語学・教育研究論文集刊行会編『古川裕教授榮退記念中国語学・教育研究論文集』, 398-413.
- 近藤ブラウン妃美 (2019)「序章 親と子をつなぐ継承語教育」近藤ブラウン妃美・坂本光代・西川朋美 (編)『親と子をつなぐ継承語教育—日本・外国にルーツを持つ子ども』(pp.1-12)くろしお出版
- 近藤ブラウン妃美・坂本光代・西川朋美編 (2019)『親と子をつなぐ継承語教育—日本・外国にルーツを持つ子ども—Heritage language education connecting generations: From the Japanese perspective』くろしお出版
- 呉静妍 (2025)「日本における複数言語環境で育つ外国ルーツの若者の言語使用とその意味づけ—幼少期に来日した若者の語りから—」『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究』21, 68-80.
- 櫻井千穂 (2018)『外国にルーツをもつ子どものバイリンガル読書力』大阪大学出版会
- 中家晶瑛 (2024)「言語継承における継承語不安と継承語イデオロギー—日本社会で継承語を継承しなかったニューカマー2世の語りから—」『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究』20, 99-111.
- 西川 (長谷川) 朋美 (2011)「在日ベトナム系児童の継承語としてのベトナム語能力」『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究』7, 46-65.
- 西川朋美・青木由香 (2018)『日本で生まれ育つ外国人の子どもの日本語力の盲点—簡単な和語動詞での隠れたつまずき—』ひつじ書房
- 平川真規子・福田倫子・鈴木一徳・姜銀実 (2017)「中国語の関係節の理解と産出—日本在住の継承中国語話者を対象とした探索的研究—」『言語と文化』29, 59-85.
- 真嶋潤子編 (2019)『母語をなくさない日本語教育は可能か—定住二世児の二言語能力—』大阪大学出版会
- Birdsong, D., Gertken, L.M., & Amengual, M. (2012). Bilingual Language Profile: An Easy-to-Use Instrument to Assess Bilingualism. COERLL, University of Texas at Austin. Web. 20 Jan. 2012. <https://sites.la.utexas.edu/bilingual/>
- Bylund, E. (2009). Maturation constraints and first language attrition. *Language Learning*, 59(3), 687-715. <https://doi.org/10.1111/j.1467-9922.2009.00521.x>
- Carreira, M., & Kagan, O. (2011). The results of the national heritage language survey: Implications for teaching, curriculum design, and professional development. *Foreign Language Annals*, 44(1), 40-64. <https://doi.org/10.1111/j.1944-9720.2010.01118.x>
- Hollebeke, I., Struys, E., & Agirdag, O. (2020). Can family language policy predict linguistic, socio-emotional and cognitive child and family outcomes? A systematic review. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 44(10), 1044-1075. <https://doi.org/10.1080/01434632.2020.1858302>
- Laufer, B., & Waldman, T. (2011). Verb-noun collocations in second language writing: a corpus analysis of learners' English. *Language Learning*, 61(2), 647-672. <https://doi.org/10.1111/j.1467-9922.2010.00621.x>
- Long, M. H. (1990). Maturation constraints on language development. *Studies in Second Language Acquisition*, 12(3), 251-285. <https://doi.org/10.1017/S0272263100009165>
- Montrul, S. (2016). *The acquisition of heritage languages*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Montrul, S. (2023). Heritage languages: Language acquired, language lost, language regained. *Annual Review of Linguistics*, 9, 399-418. <https://doi.org/10.1146/annurev-linguistics-030521-050236>
- Paradis, J. (2023). Sources of individual differences in the dual language development of heritage bilinguals. *Journal of Child Language*, 50(4), 793-817. <https://doi.org/10.1017/S0305000922000708>
- Skutnabb-Kangas, T. (1984). *Bilingualism or not: The education of minorities*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Szudarski, P. (2023). *Collocations, corpora and language learning*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Talmy, L. (1991). Path to realization: A typology of event conflation. In C. Johnson, L. Sutton, and R. Shields (Eds.), *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society*, 480-519. <https://doi.org/10.3765/bls.v17i0.1620>